

## 幕末明治の写真師列伝 第五十四回 内田九一 その十九

昭憲皇太后の肖像写真については、「明治天皇紀」明治6年10月14日の条に、「皇后、午前十時御出門、吹上御苑に行啓あり、先ず御梅茶屋に御小憩、尋いで寫真場に入りたまひ、和装にて撮影あらせらる」とある。

「昭憲皇太后」(明治6年・湿板・303×243ミリ、現宮内庁所蔵)

この昭憲皇太后の写真も詳細に観察すると両手で持たれた扇の開き方や、衣の前の合わせ方に違いがあり、これもまた複数のカットがあったことを示している。後に明治12年元老院の命によって五姓田義松の描いた皇后の肖像も、この時、内田九一が撮影した写真を元にしてしている。

これらの軍装姿の明治天皇と和装の昭憲皇太后の写真はその後市中に広がって相当数が複写され、さらに複写が複写されて売られたようである。内田九一自身も明治7年3月に御写真の種板下付を東京府に願ひ出ているが、却下されている。しかし、それにもかかわらずその後も、明治天皇、皇后の肖像写真を複写して、手札写真として販売していた。

明治天皇など撮影をした際には、写真術の講習のため大阪から全国を回っていた上野幸馬が内田九一の助手として傍にいた。上野幸馬は後に一時は宮内省の御用御時計師になっていたが、晩年は不遇だった。明治29年4月17日逝去。(注1)

さて、この二度の明治天皇撮影の間、明治5年5月23日から7月12日に、参議西郷隆盛などを従えて、明治天皇は近畿、中国、四国、九州を御巡幸する。この御巡幸で明治天皇は品川沖から軍艦に乗り、5月25日伊勢、5月28日大阪、5月30日京都、6月4日に再び大阪に戻って軍艦に乗り、6月10日下関、6月16日長崎、6月17日熊本、6月22日鹿児島、7月4、5日丸亀、7月6日神戸と歴訪して、7月12日に東京に帰還した。この御巡幸のほとんどは海路の旅であった。

この御巡幸に内田九一は随行を命じられて日本の各地の名勝、風景を撮影している。この時の写真は明治5年「西国巡幸」二帖の写真集として、財団法人霞会館に所蔵されている。後にこれらは東京市に買い上げられてウィーン万博に出品することを目的として太政官正院内に設けられた「澳国博覧会事務局」へ納められたものともいわれる。その全貌は解明されていないものの、前年の明治5年から6年にかけて、全国各府県から様々な写真が「澳国博覧会事務局」に集められている。その数も東京国立博物館所蔵「澳国博覧会出品目録」によれば、「東京府下買上ノ品」だけで1324枚に上る。内訳は、「大判写真二百枚、小判写真六百七十六枚、日光写真百十四枚、御巡幸写真九十六枚(内田九一ヨリ買上)、日光写真四枚(同)、スチーフレット写真百九十四枚、写真十六枚(内田九一ヨリ買上)、写真四枚ツゝ六組」とあり、内田九一が撮影した御巡幸の時の風景写真96枚、日光写真4枚とその他の写真を16枚が出品されている。明治6年(1873年)のウィーン万国博覧会には物産と共にこれらの写真が送られている。そしてその出品された写真には、横山松三郎と共に内田九一の撮影による物も含まれていた。これらも、「鹿鳴館秘蔵写真帖」(財団法人霞会館編)及び「東京国立博物

館所蔵 幕末明治期写真資料目録1 図版篇 データ綜覧篇」(東京国立博物館編、国書刊行会、平成11年)を参照された。 「東京国立博物館所蔵 幕末明治期写真資料目録1 図版篇」には、「水前寺成趣園」(鶏卵紙、明治5年)、「鹿児島台場」(鶏卵紙、明治5年)、「田口和美」(鶏卵紙、明治5年頃)(内田製台紙・田口のサインあり)、「松本喜三郎」(鶏卵紙、明治5年頃)(内田製台紙)、「鹿児島城本丸内部」(鶏卵紙、明治5年)、「鹿児島城本丸内部」(鶏卵紙、明治5年)、「鹿児島城本丸内部(?)」(鶏卵紙、明治5年)、「鹿児島城本丸内部」(鶏卵紙、明治5年)、「大坂造幣寮」(鶏卵紙、明治5年)、「布引滝」(鶏卵紙、明治5年)、「布引滝」(鶏卵紙、明治5年)、「湊川久形橋」(鶏卵紙、明治5年)、「神戸病院」(鶏卵紙、明治5年)、「天満橋」(鶏卵紙、明治5年)、「高麗橋」(鶏卵紙、明治5年)、「鹿児島市街」(鶏卵紙、明治5年)、「磯紡績所」(鶏卵紙、明治5年)、「新波戸砲台(薩州台場)」(鶏卵紙、明治5年)、「鳥羽港」(鶏卵紙、明治5年)、「鳥羽港」(鶏卵紙、明治5年)、「鳥羽港」(鶏卵紙、明治5年)、「下関亀山八幡」(鶏卵紙、明治5年)、「下関亀山八幡」(鶏卵紙、明治5年)、「下関亀山八幡」(鶏卵紙、明治5年)、「熊本城」(鶏卵紙、明治5年)、「熊本城」(鶏卵紙、明治5年)、「熊本城内加藤神社」(鶏卵紙、明治5年)、「熊本城」(鶏卵紙、明治5年)、「鹿児島城」(鶏卵紙、明治5年)、「滝通朱橋」(鶏卵紙、明治5年)、「邸内ノ庭園(撮影地不詳)」(鶏卵紙、明治5年)、「大坂西本願寺」(鶏卵紙、明治5年)、「大坂西本願寺」(鶏卵紙、明治5年)、「京都御所」(鶏卵紙、明治5年)、「知恩院表門」(鶏卵紙、明治5年)、「知恩院本堂」(鶏卵紙、明治5年)、「上加茂神社」(鶏卵紙、明治5年)、「上加茂神社」(鶏卵紙、明治5年)、「上加茂神社」(鶏卵紙、明治5年)、「上加茂神社」(鶏卵紙、明治5年)、「男性肖像」(鶏卵紙)(内田九一台紙)、「集合写真」(鶏卵紙)(男性2人・英文で「1870年5月頃撮影?」の記載あり(意味不明))、「男性肖像」(鶏卵紙)、「男性肖像」(鶏卵紙)、「男性肖像」(鶏卵紙)、「集合写真」(鶏卵紙)(内田台紙)、「集合写真」(鶏卵紙)(男性4人)、「細川邸」(鶏卵紙)(内田台紙)、「湊川神社」(鶏卵紙、明治5年)、「御座船天地丸」(鶏卵紙、明治7年)、「御座船八幡丸」(鶏卵紙、明治7年)、「御座船上総丸」(鶏卵紙、明治7年)、「御座船国市丸」(鶏卵紙、明治7年)、「御座船鳳凰丸」(鶏卵紙、明治7年)と数多くの内田九一撮影の写真が所蔵されている。

注1 上野幸馬

天保十二年長崎生、寫真元祖上野俊之丞常足は父、上野彦馬は兄であった。研究心に富み原書により新コロジオン法に通じ、明治初年神戸に寫場を開き、京阪神の寫真師を指導全国を講習しつつ東上、築地に幸謙社寫場を開いた。宮内省御時計師も務む。明治二十九年四月十七日逝去、後裔上野陽一氏。

(梅本貞雄編『日本写真界の物故功労者顕彰録』(日本写真協会、昭和27年)より)

(森重和雄)